
二人の住居は段ボールハウス

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の住居は段ボールハウス

【Nコード】

N8145T

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

不慮の事故で両親を失った雲仙兄妹は段ボールハウスで貧困生活を送っていた。

ある日、三雲の妹 八雲が三雲に一枚のピラを手渡してきた。

そこには『新婚さんかかってこんかいコラ』と記載されており、優勝すれば多額の賞金が支払われるとのこと。

雲仙兄妹は優勝賞金を獲得するため、雲仙夫婦としての日々を送り始める

新婚夫婦っばいことするよ

《第一章》

「おい、くつつくなよ」

じめじめとした室内に響く、低い声。

声主の雲仙三雲は齡十八とは到底思えない疲れ切った表情で、隣に座り、ピッタリ身体を寄り添わせて至福の表情をしている二つ年下の妹、八雲に告げた。

八雲は、くりくりとした大きな瞳で三雲を見つめ、幼い声色で、
「だって狭いんだもん」

そうして屈託のない笑顔を三雲に向けた。三雲はため息混じりに言葉を返す。

「でも少しはスペースあるだろ？ ただでさえ狭いんだから、少しは有効活用しろよな」と。

雲仙兄妹の生活拠点は、最寄り駅から歩いて五分、コンビニまで徒歩三分という立地に所在している。と、そう言われると聞こえはいいかもしれないが、その反面、日当たりは最悪であり、十月上旬にも関わらず、室内は湿気で蒸せかえっている。

それに雲仙兄妹の生活スペースは畳一畳半にも満たないため、当然ながら風呂もトイレも台所も存在しない。

高さも一メートル程度しかないため、身長百七十センチメートル後半の三雲は、立ち上がることにすら許されていない。

それは、百四十センチメートル前半という年齢とは不釣り合いな低身長を誇る八雲とて同じことである。

それでは、どうして二人の家はこんなにも小さいのだろうか。

なぜなら二人の生活空間は、橋の下に設けられた『段ボールハウス』だから。

もともと雲仙兄妹は両親とアパートで暮らしていた。

二人の両親は朝から夜遅くまで身を粉にして働いていたが、それでも貧困生活を脱することは叶わなかった。

しかし贅沢はできないまでも、雲仙一家は家族仲良く幸せな日々を送っていた。

だが三年前の春、両親は同じ派遣先に向かう途中で交通事故に遭い、そのまま帰らぬ人となった。

そのため三雲は高校進学を取り止め、八雲を養うために、明けても暮れてもアルバイトに勤めていた。

そんな頑張りも空しく、生活の貧困化を食い止めることは叶わなかった。全ての家具を売り払っても、雀の涙程度にしかならなかった。

二人には、まだ両親の形見の結婚指輪が残されていた。しかし、換金しようとは思わなかった。売っても大した金額にならない、ということとは関係なく、ただ身につけていると両親に守られている、と感じられるからだ。

だから二人は、より一層両親を感じるため、各々左手の薬指に結婚指輪をはめている。

三雲はアルバイト先で、既婚者なのか、と勘違いされることも多々あった。もちろん、三雲はその度に否定していた。

そんな生活が半年続いたころ、ついに無一文となった二人は借家を追い出され、同時に住所不定となった三雲はアルバイトを解雇された。

そうして雲仙兄妹は、数着の衣類が詰め込まれたビニール袋を片手に、ホームレス生活を余儀なくされたのである。

しかし、十数年にも渡る貧困生活により雑草魂を身につけていた二人は、絶望することなく、ホームレスとして新たな一歩を踏み出

した。

それから三日後。雲仙兄妹は大きな橋の下に段ボールハウスを建設し、そうして現在に至るまでのあいだ、時折愚痴を溢しながらも劣悪な生活環境で懸命に暮らしているのである。

とはいえ、できることなら脱貧乏を果たし、どれだけ老朽化が進んでいようと構わないので、とにかく、『これは家だ』と胸を張って言えるような生活拠点を確保したいという願望は持っていた。

「やだつ。八雲はみつくんから離れない！ みつくん大好きっ！」
言つて、八雲はギュツと三雲に抱きついた。

小学校に通つていても違和感のない幼い容姿の八雲は、堅気とは到底思えない凶悪面の三雲のことを、こよなく愛していた。

「ちよ、抱きつくなんての！ それに、そんな大声で大好きなんて言うなよ。お隣さんに聞こえるだろ？」

そんな言葉とは裏腹に、僅かに頬を緩ませる三雲。

兄の威厳を保つため、できるだけ表に出さないようにしているが、三雲は隠れシスコンだった。

そして三雲の『お隣さん』発言。これはつまり、橋の下で生活しているホームレスは、雲仙兄妹だけではない、ということの意味している。

正確には四人。そこに雲仙兄妹を合わせた計六人が、橋の下で暮らすホームレスの総数である。

「大丈夫だよ。みつくと八雲は公認カップルなんだから。橋の下では常識だよ？」

呆れ顔で八雲。

しかし、そんな常識は八雲の脳内にしか存在していない。他のホームレスたちにとって、二人は仲睦まじい兄妹として認識されている。越してきた当初は、婚約指輪のこともあり、夫婦なのか、と尋ねら

れた。もちろん三雲は否定した。しかし八雲は全力で肯定した。首が取れてしまうのではないかと三雲が不安に思うくらい、首を縦にブンブン振った。三雲は負けじと首を横にブンブン振った。その結果、三雲の首振り力に軍配が上がり、そうして二人は、晴れて兄妹と認識された。

そんな過去を踏まえた上で、三雲は冷静に指摘する。

「仮にそうだとしても、本人が認めてないからな？」

「拳式の際は、おじさんたちも祝杯を挙げてくれるよ」

三雲の言葉を意に介さず、八雲は妄言を続行した。

三雲は深く嘆息し、

「あのな、八雲？ 兄妹同士の結婚は法律で禁じられてるんだぞ？」

「八雲、いっぱい子供欲しいなあ」

八雲は満面の笑みで、幸せな家族計画を語った。

「……」

三雲は沈黙した。どうせ結婚できないのだから妄想くらい許してやろう、と心中で妥協案を採った。

それにまあ、過酷な現実を生きる八雲。せめて空想の世界くらいは幸福であつてほしい。これで題材が禁忌じゃなかったらなあ、と複雑な心境の三雲。気持ちを切り替えようと、扉の代役を果たしている厚手の布を掴み、カーテンの要領でシュツと開いた。

「眩しっ」

思わず声を漏らす三雲。扉から顔を出し、鷹のような鋭い眼を細めて辺りを見回した。

右側に三軒、左側に一件の段ボールハウス。人の気配は感じられない。すでに帰宅していると思っていたが、まだ仕事に励んでいるのだらう。と、三雲は推察した。

橋の下で暮らす彼らの仕事はゴミ拾い。空き缶や古本、そして家電などを收拾し、業者に引き渡すのである。日中働いたとしても収入はごく僅か。しかし他に仕事はないため、彼らは広域に渡ってゴ

ミを回収し続けているのである。

今はこうして兄妹水入らずの時間を過ごしているが、しかし雲仙兄妹とて例外ではない。二人は朝から二時間前まで仕事に勤しんでいたのだ。

時計を有していないため正確な時刻は不明だが、日が沈みかけていることから、現在の時刻は午後六時前後だろう。と、そう判断した三雲は、顔を引っ込め、布を閉めて日光を遮断。それでも真っ暗闇ということはなく、日光を当てられた布は薄く明らみ、室内を薄く照らしていた。

さらに雲仙兄妹は夜目が利くため、たとえ闇夜であろうとも、お互いの表情を読み取ることなど造作もなかった。

そうして三雲は、ブツブツと幸せな独白に夢中の八雲に、声をかける。

「ちよつと寝るから」

と、現実の世界に舞い戻った八雲は、その短い言葉で三雲の心中を察した。

「それじゃあ八雲もっ」

言って、八雲は横になった。三雲は風邪を引かない様にと、隅に畳んで置いていた薄いシーツを八雲に被せ、その隣に寝転んだ。すると八雲はもぞもぞ動き、

「みっくんも」

と、三雲にもシーツの恩恵を与えた。

「サンキユな」

三雲は軽く微笑みかけた。それを受けた八雲は、照れたのか赤面した。

二人は向き合い、同じ方向 扉側に頭を向けて横になっている。そして幅がないため身体を密着させて寝転がる。と、これが雲仙兄妹の睡眠スタイルである。

その際、八雲はまるで抱き枕であるかのように三雲を扱っている。きつと安心するのだろうか。と三雲は考え、咎めないでいるが、しかし

「はあはあ」と荒い息を漏らすのは止めてほしいと人知れず願っていた。

三雲は瞳を閉じ、よほど疲れていたのか、すぐに寢息を立て始めた。

しばらくのあいだ三雲の寝顔を堪能していた八雲も、疲労が溜まっていたのか、三雲を見つめたい衝動に駆られながらも、しかし睡魔に敵わず、小さな寢息を立て始めた。

二人が就寝して数時間が経過した。

「……………んむう？」

外から聞こえる談笑の声に反応し、三雲は目を覚ました。

聞き慣れた声色からして、おそらくホームレス仲間が帰宅したのだろう。と、そう確信した三雲は、八雲を起こさないように、ゆっくり身体を起こして外に出た。

河原は橋の上に設けられた街灯によって薄く照らされている。橋の下は、その余波を受けて、ぼんやりと明らんでいた。

雲仙兄妹の段ボールハウスから三メートル程離れた位置に四人の間が勢揃いしており、本日の稼ぎを報告し合っていた。

と、四人の中で一番大柄な男が三雲に気付いた。

「おう！ おはよう三雲くん」

そう朗らかな声で挨拶をされた三雲は、笑顔で言葉を返す。

「おはようございます、東山さん。それに、西谷さん、南野さん、北島さん。今日の稼ぎはどうでしたか？」

「俺は千円だ。ここ最近で一番の稼ぎだな」

満面の笑みで東山が言った。それに相反し、南野と呼ばれた痩せ気味の男は暗い声色で、

「僕は三百円だよ……………」

「まあ、そんな日もあるさ。ちなみに自分は六百円だ」

落ち込む南野を慰めつつ、口周りに立派な髭を生やした西谷は自

身の稼ぎを口にした。

「そしてワシは八百円。まあ平均じゃな」

最年長にして橋の下段ボールハウスの第一人者である北島が、二カツと笑い、三雲に告げた。そのまましわがれた声で、

「それで、二人の稼ぎはいくらじゃった？」

「あ、はい。俺と八雲、合わせて八百円……北島さんと同じですね」
若干誇らしげな三雲。

ゴミ回収を始めてしばらくは、南野程度の収入を得ることで精一杯だった。しかし雲仙兄妹はコツ どこに目当てのゴミが落ちているのかを察知する を掴んだ。そうして今では、先輩ホームレスに引けを取らない稼ぎを獲得するまでに成長したのである。

「つまり僕が最下位ってことだね……」

言って、南野は嘆息した。東山は、そんな南野の背中をバシッと叩き、

「いつまでも落ち込んでんじゃねえよ！ それに今日は救世主が降臨する日だろ？ 飯代浮くじゃねえか！」

そんな励ましを受けた南野は、一転、満面の笑みを浮かべた。

「そっか、今日は金曜日だったね！ 西谷氏、現在時刻は？」

この中で唯一時計を所有している西谷は、茶色いコートのポケットから錆びた懐中時計を取り出した。

「九時半だ」

西谷は端的に告げた。

「じゃあ、あと三十分くらいだね！ 今日はなにかなー、楽しみだなー！」

今年で三十八歳の南野は、しかし子供のように飛び跳ね、身体で喜びを表現した。

と、南野の歓声により目覚めたのだろう。八雲が眠たそうな、ぼんやりとした顔つきで段ボールハウスから現れ、寝ぼけ眼を擦りながら、

「ん……おはよ」

普段は高テンションの八雲。しかし寝起きは大人しかった。八雲の登場により、三雲を除く四人は一斉に頬を緩ませた。童顔かつ低身長八雲は、ホームレスたちにとって天使のような存在なのである。

「おはよお〜八雲ちゃ〜ん」

うつとり顔の東山。次いで西谷が力強く南野の背中を叩き、「この馬鹿が騒ぐから起きちゃったんだよねえ？ ……ほら、早く謝れよ！」

南野は深く腰を落とし、

「ご、ごめんね？ もしかして八雲氏、怒ってる？」

「ううん。八雲、怒ってないよ？」

笑顔で八雲。そのままトコトコと三雲のもとまで歩み寄り、ヒシツと腰に抱きついた。

そして八雲は、上目遣いで三雲を見つめ、

「みつくん、夢の続きしよっ！」

目覚めてからわずか一分で高テンションを取り戻した八雲。三雲は困り顔で尋ねた。

「……それ、どんな夢だ？」

「んつとね、えつちなことを」

「しないからなっ？ 現実の世界のお兄ちゃんは、そんなことしないからなっ？」

三雲は咄嗟に、八雲の言葉を打ち消した。

「やだ！」

しかし八雲は否定した。

と、大声を出したからか、八雲の腹部から「くうう」と小さな腹の音が聞こえた。

八雲の空腹をいち早く察知した北島が、優しい口調で語りかけた。

「もうじき救世主様が降臨するから、もう少しだけ我慢しようねえ」

「おじいちゃん、それほんっ？ 今日お姉ちゃん来てくれるのっ？」

八雲から『おじいちゃん』と呼ばれた北島は、まるで孫を得たような、幸せな気持ちに駆られた。

まあ、毎日のように呼ばれているのだが、それでも嬉しさが薄れることはなかった。

「ああ、本当だとも。おじいちゃんは嘘なんて吐かないからねえ」

嘘が原因でリストラに遭い、そうしてホームレスとなった北島は、八雲に気に入られるために嘘を吐いた。

それを知ってか知らずか、八雲は再び三雲の顔を見上げて端的に尋ねた。

「みつくん、お姉ちゃん」

「ちゃんと来るから安心しろ」

三雲に全幅の信頼を置いている八雲は、よほど嬉しかったのか、両腕を天高く突き上げ、

「やったあゝ！ お姉ちゃんが来るうゝ！」

「八雲、ご近所さんから苦情が来るから少し声のトーンを落とせ」

もし近隣の住民が『ホームレス迷惑だ』とでも役場に通報した日には、段ボールハウスなど即座に撤去されてしまうだろう。今は黙認されているが、しかし気を抜くわけにはいかないのだ。

「やったあゝ。お姉ちゃんが来るうゝ」

注意を受けた八雲は、三雲の指示通りに小声で喜びを表現した。

他の五人は、そんな八雲を觀賞しつつ、『救世主』の到来を待ち続けた。

八雲が目覚めて数十分が経過した頃。

段ボールハウスから五十メートルほど離れた場所に設けられた階段を活用して、一人の少女が下りてきた。

両手にビニール袋を携えた少女は、そのまま迷うことなく一直線に、段ボールハウス目指して足を運ばせた。

依然として八雲を鑑賞していた五人は、しかし足音を察知して、

少女の到来に気付いた。

「救世主氏だ！」

と、満面の笑みで南野。それを聞いた八雲は、救世主と呼ばれた少女のもとに駆け寄り、

「救世主のお姉ちゃ〜んっ！」

ガバツと抱きついた。

「いや、だから何度も言うけど、あたし救世主なんかじゃないからね？」

言つて、八雲を引きずりながら、少女は三雲たちのもとへと辿りついた。

「よう神様。いつも悪いな」

手を上げて、ニカツと笑う三雲。少女は猫のような、若干つり上がった瞳で三雲を睨み、

「だから、神様言うなつての！ あたしには赤神紅葉つて立派な名前があるんだからな！」

紅葉は胸に手を当て、毅然とした態度で名乗った。

男勝りの口調だが、しかし顔中のパーツを全て神様にオーダーメイドしたのではないか、と疑ってしまうくらいに紅葉は端正な顔立ちをしていた。

肩口まで伸ばした茶色い髪をポニーテールでまとめており、それが紅葉の女の子らしさを際立てている。

それに出るところは出て、引っ込むべき箇所は引っ込んでいる。

そんな容姿端麗かつスタイル抜群の紅葉に、北島が期待感の込められた口調で言葉を向けた。

「それで救世主様。今日は我々に何を与えてくれるのですかな？」

南野は跪き、紅葉に両手を突きだしていた。

紅葉は小さく息を吐き、

「だから崇めるなつてば！ あんたら何度も同じこと言わせるなよ。バイト終わりで疲れてるんだから」

「そうは言つても、俺たちは救世主に心底感謝してるからな！ ほ

んと、ありがたいぜ！」

言って、東山は豪快に笑った。

「おい東山、笑うなら静かに笑えよ」

西谷から指摘を受けた東山は、口元を押さえてクスクス笑った。

そんな上品な笑い方を身につけた東山を横目に、紅葉は右手に携えたビニール袋を一番近くにいた北島に手渡した。

「東西南北の四人で仲良く分けるよな」

東西南北とは成人ホームレス四人の名字を総まとめにした名称であり、紅葉が命名した。

北島は礼を告げ、ビニール袋の中身を確認　そこには期限切れのオニギリが四つ入れられていた。

赤神紅葉の正体は、橋の下から徒歩三分の位置に建てられたコンビニのアルバイト店員。バイト終わりに期限切れの食品をホームレスたちに届けているのである。

紅葉が期限切れの食料を配給するようになったのは、今から半年ほど前のこと。

他のホームレスたちは近所の公園に設けられた簡易トイレを利用してはいるが、雲仙兄妹はコンビニをトイレとして活用していた。

成人ホームレスたちも当初は頻繁にコンビニトイレを活用していたのだが、一年が経過したころ立ち入りを禁止された。しかし、新参の雲仙兄妹は自由に利用することができたのだ。

そんなある日の夜。

いつものようにコンビニトイレを利用した三雲は、何も買わずに、そのままコンビニを出ようとした。

そのとき一人アルバイトをしていた赤神紅葉は、頻繁にコンビニトイレを利用している三雲を訝しげに思い、こう呼び止めた。

「あんたの家、トイレないの？」

三雲は恥じることなく、毅然とした態度でこう言った。

「トイレどころか家がない」と。

予想外の返答に紅葉は呆けた。しかし即座に我に返ると、三雲の言葉に興味を抱いたのか、

「もう少しでバイト終わるから、それまで立ち読みでもしてな」

その日の仕事を終えていた三雲は、特にやることもなかったため、言われた通り、立ち読みをすることにした。

そうして三雲が住宅雑誌を読み、幸せな妄想を繰り広げていたところ、

「待たせたな」

と、バイト着から私服に着替えた紅葉が現れた。

紅葉の服装は上下共に黒のジャージ。住宅雑誌から紅葉に視線を移した三雲は一言。

「なんでジャージ？」

三雲は女の子に可愛いといった感情を抱いたことはなく『女の子が私服にジャージ？』と単純に疑問視しただけなのだが、紅葉は声のトーンを落とし、

「友達からも頻繁に『紅葉可愛いんだからジャージは止めたほうがいいよ』って言われるんだが……やっぱり似合わないか？ というか私服にジャージって変なのか？」

と、特に親しい間柄ではない三雲に尋ねた。すると三雲は冷静に、「とりあえず店出ないか？ 迷惑になるだろうし」

その言葉を契機に、二人はコンビ二横に設けられた簡易ベンチに場所を移した。

「似合うよ、ジャージ」

ベンチに腰を下ろした直後、三雲が言った。紅葉はパアッと顔を明らめ、

「ほんとかつ？ それがあんたの本心なんだな？ 嘘だったら針千本飲ますからなっ？」

「ああ、ゴクゴク飲んでやるよ。それと俺の名前は雲仙三雲だ。お

ひつじ座のO型。歳は十八だ」

三雲は特に面識のない紅葉に詳細な自己紹介を果たした。

紅葉は緩んだ頬をキリツと整えた。

「あたしは赤神紅葉。親元を離れて近所の紅谷荘で一人暮らしをしている冷泉高校の二年生……です」

紅葉は出会ったばかりの三雲に、生活拠点を明かした。

「タメ口でいいよ」

それどころか馴れ馴れしく接してくれても構わない、と付け加える三雲。

「わかった。それじゃあ三雲。率直に訊くけど、もしかしてあんたホームレスなのか？」

「まあな。まだデビューして間もないけど、今すぐにも引退したい所存だ」

自虐めいた口調で三雲。

紅葉は「そっか……」と小さく呟き、暗い心境になったのか俯いてしまった。

しかし。

「み、三雲、あんた既婚者なのかっ？」

と、三雲にバツと視線を移し、声を荒げて尋ねた。

三雲は左手を紅葉に向け、落ち着いた口調で理由を説明

「既婚者じゃなくて、この指輪は妹と」

妹と結婚したのかっ？」

している途中で、早とちりした紅葉に言葉を遮られた。

「するかっ！」

三雲は腹の底から声を出して否定。そして紅葉の勘違いを完全に払拭するため、指輪の話はもちろんのこと、ホームレスとなった経緯を事細かに説明した。

「てことで、要するに結婚してない……ってどうした？ 下になにか落ちてるのか？」

説明に夢中だったため三雲は気付かなかったが、数分前から紅葉

は俯いていた。
が。

「ちよわっ！」

突然、紅葉は身体を捻って三雲に抱きつき、その状態で頭を撫で始めた。

「あんだぼぐるうじだんだなあ」

涙声で紅葉。あまりにも涙声過ぎて、三雲は上手く聞き取れなかった。

とうか紅葉は号泣していた。

三雲の右肩には紅葉の涙が降り注いでいる。大袈裟な表現ではなく、本当に超局地的な雨でも降っているんじゃないか、と思ってしまうくらいに、三雲の右肩は急激な速度で、生温かく湿り続けている。

思わぬ事態に困惑した三雲は、同じように紅葉の頭を撫で始めた。そんな二人は、傍から見ると変人以外の何者でもなかった。

それから数分後　紅葉は落ち着きを取り戻すと、三雲から身体を離し、袖口で涙を拭って一言。

「あたしに……ひつく……なにか……ひつく……できることは……
ぐずっ……ないか？」

おえつ交じりだったが、しかし今回は聞き取れた。三雲は紅葉の好意に感謝しながらも、

「いや、でも俺たち出会ったばかりだし、さすがに悪い」

「困ったときはお互い様だひつく……る！」

惜しいところでおえつが交じったが、しかし紅葉は言い切った。

三雲はなにか言い返そうとしたが、

「そっだ食べ物！　食べ物だ！」

「お腹空いたのか？」

「空いてるけど、でもそっじゃなくて！　三雲たちを食料面で補助してやる、ってこと。ついでに他のホームレスたちの分も用意してやるよ」

「気持ち嬉しいけど、でも、それだと赤神に」

「紅葉でいい。あたしも名前で呼んでるんだし」

「それだと紅葉に負担が」

「安心しろ。負担は皆無だ」

紅葉は三雲の発言を先読みした。そのまま、

「期限切れの食べ物も廃棄しなくちゃいけないんだけど、でも店長に頼めば多分貰えるよ。あの優しいから。んで、それを三雲たちのところに届けてやるから、だから無料なんだ」

それを聞いた三雲は、しばらく思索し、

「もし断られてもあたしは届けに行くぞ？ そうしないと落ち着かないんだ。困ってる人がいたら有無も言わずに助けなさい」って父親から耳にタコができるくらい言われたし、そりゃ困ってる人全員を助けられるわけじゃないし、他人からしたら偽善者ぶってるように見えるかもしれないけど……でも、やらない善よりやる偽善……というかやらない善はそもそも善じゃないよな！ 善人なら迷うことなく行動するだろうし……あれ？ ふと思ったんだけど、それじゃあやる善は存在するのか？」

ているあいだに紅葉は長々と語り、最終的に、ふと思ったことを質問された。

三雲は思索内容を切り替え、そして答えた。

「……紅葉が『これはやる善だ』と思ったら、もうそれが『やる善』ってことでいいと思う」

「なら、あたしの行いは、やる善ってことだな！ 三雲、あたしを善人にしてくれ！」

なんか本気でお願いされた。しかしまあ、三雲にとって紅葉の申し出は悪い話ではない。というか、むしろ大助かりである。

三雲は大きく頷くと、

「俺が紅葉を善人にしてやるよ」

「恩に着る！」

喜色満面で紅葉。どうしてか二人の立場が入れ替わっていた。

「それじゃあ善は急げだ。店長にお願いしてくるから、ちよっと待

「つてろ」

言って、紅葉は入店すると、そのままスタッフルームに入っていた。

そして数分後　紅葉は両手にビニール袋を携えて現れた。

「自分で食べるのが目的なら構わない、って言われた」

「なんて言い返したんだ？」

「食べます。実はあたし大飯食らいなんです、一日五千キロカロリーは摂取しています、って答えた」

「……なんて言い返された？」

「二千カロリーに抑えなさい、って言われたから、前向きに検討します、って言い返して、それで終わり……そんなわけで、こうして無事に食べ物をゲットしましたとき。めでたしめでたし」

ニシシと笑って、紅葉が言った。

そうして、この日を境に紅葉は、日曜日、火曜日、木曜日、そして金曜日と、シフトに入っている曜日は、バイト終わりに橋の下に赴き、期限切れの食料を配給するようになり、いつしか　というか初日から、ホームレスたちに『救世主』と称され、崇められるようになったのである。

「んで、これがあたしたちの分だ」

紅葉は左手に携えていたビニール袋を誇示するようにさし上げた。

あたしたちの分　初日以降、紅葉は食料を配給するついでに、

三雲たちと一緒に食事を採るようにしていた。紅葉曰く、一人よりも大勢と一緒に食べるほうが美味しく感じられるから、だそうなの。

「今日はなにっ？」

期待感に満ちた声で、八雲が尋ねた。

紅葉は雲仙兄妹を手招きした。そうして、二人にビニール袋の中身を見せながら、

「焼きそばパンと焼きそばパン……あと焼きそばパンだ」

「今日は焼きそばパン祭りだねっ」

弾んだ声で八雲。

「焼きそばパンだけって、ある意味スゲーな」

複雑な表情で右京。紅葉はパアツと笑顔になり、

「だろっ？ あたしも期限切れチエックしながら思ったよ。これはもう、あたしたちから食されるために入荷されたんじゃないか、つてな！ 奇跡だよ！ ミラクルだ！」

「そ、そうだな……」

言って、三雲は土手に設けられた階段を指差し、

「んじゃ、いつもの場所で」

普段は段ボールハウス内で食事をしている雲仙兄妹であるが、しかし紅葉が現れた日に限っては、階段に場所を移すことにしている。段ボールハウスに三人は窮屈なのだ。

他のホームレスたちは、紅葉に一礼した後に、各々の自宅へと消えていった。

そうして残された三人も、食事を採るべく階段へと足を運ばせた。

食事が終わったところで、紅葉が立ち上がった。そうして、口を開きかけたところで、三雲が立ち上がり、

「ソース付いてるぞ？」

言って、紅葉のシュツと尖った顎先に付着したソースを、なんの躊躇いもなく、親指で拭きとった。

「んむ……悪いな」

薄く頬を紅潮させて紅葉が言った。三雲は小さく笑い、
「もう一人妹ができた心境だ……まあ、立場的には助けられてる側
なんだけどな」

紅葉は若干顔を曇らせ、小声で、

「妹か……それはそれで悪くないが、でもなあ……」

「ん？ なんかつたか？」

「い、いや、なんでもないぞ？ きつと風の音だ」

豊満な胸の前で両腕をバタバタさせて、紅葉が言った。

「いや、無風なんだけど……というか八雲、どついう食べ方したら、そうなるんだ？」

三雲は怪訝な顔で八雲を見つめた。

「どつって、八雲は普通に食べたただだよ？」

口周りに大量のソースをペイントした状態で、八雲は首を傾げた。八雲の口は、二人と比べて小さいため、余計にソースが付着したのだろう、と三雲は自分を納得させた。

「ま、どうせこれから風呂入るんだからさ。気にすることはないって」

ニシシと笑う紅葉。

「ほんと悪いな……それじゃあ八雲、着替えを」

「うんっ！ 分かってるよ、みつくん！」

そう三雲の言葉を制止すると、八雲は段ボールハウスへと駆けていった。

「三雲は……やっぱり来ないのか？ 別に遠慮なんてしなくてもいいんだぞ？」

八雲が段ボールハウスに入室したところで、紅葉がポツリと言った。

「遠慮というか……女の子の家で入浴するのは、さすがに抵抗感があるんだよな。まあ、俺は普段通り銭湯に行くよ」

頬をポリポリ掻きながら三雲。

普段、雲仙兄妹は近所の銭湯に通っているが、しかし紅葉が現れた際は別である。

三雲は先の言葉通り断っているが、八雲に限っては、紅葉の恩恵を受けさせてもらっている。

紅葉は小さく息を吐き、

「なら女の子に下着を洗濯してもらうのはいいのか？ 別に、一緒に入浴するわけじゃないんだし、それに銭湯代も節約できるだろ？ 脱貧乏を果たすためにも、ここはあたしの言葉に従ったほうが身

のためだぜ？」

含み笑いをする紅葉。

「なんで悪役口調っ？」

「善と悪は紙一重だからな。それで、どうする？ あたしは三雲が我が家に来てくれたら嬉しいんだけど……」

モジモジしながら、上目遣いで紅葉。

「トイレ我慢してるのか？」

「あの嘔吐き女……」『こうすれば男はイチコロだよ』って全然じゃねーかよ……」

紅葉は肩を落とし、ボソツと毒を吐いた。

「よく聞こえなかつたけど、我慢は身体に毒だぞ？ ……まあ、分かつた。紅葉がそこまで言うのなら、お言葉に甘えさせてもらおうよ」それを聞いた紅葉は、一瞬で顔を明らめた。

「ほ、ほんとかっ？ それじゃあ三雲も着替えを」

「おーい！ 三雲、銭湯行こうぜー！」

入浴セットを脇に抱えた東山が、紅葉の言葉を掻き消した。三雲はハツとして、

「あ……悪い紅葉。入浴はまた今度つてことでいいか？」

「え、な、なんでだっ？ 三雲は女の子の家より男湯を優先するのっか？ ま、まさか、そっち系なのっか？」

紅葉は驚愕の表情で三雲を見た。三雲は首をブンブン振り、

「俺は列記としたこっち系だ！」

「こっち系とな？」

紅葉は小首を傾げた。三雲は大きく息を吐き、疲れ顔で、

「女の子が好きってことだ……毎週金曜日は東山さんたちと銭湯に行くことになってるんだよ。あの人たち週に一度、金曜日しか入浴しないから、裸の付き合いをする機会は大切にしたいんだ」

紅葉はハツとして、

「つまり三雲は中年男性の裸を見たいがために」

「じゃなくて！ いや、もうどうでもいいや……なんか疲れた」

三雲はサジを投げた。紅葉は納得しがたい表情をしていたが、

「じゃあ金曜日以外なら大丈夫、ってことだよな？」

「ん、まあそうだな。てことは日曜日に」

「なら明日だ！ 明日の午後五時に来いよ！ 指切りげんまん嘘つ

いたら針千本のくます、指切ったっ！」

紅葉は勝手に話をまとめた。

「……それ、小指絡めないと無効だぞ？ というか明日バイトじゃないだろ？」

冷静に指摘する三雲。紅葉は得意気な顔で、

「最近ルール変更したんだぜ？ ま、明日は休日だからな。そして

休日は暇人だからな。そんなわけで来い」

「まあ紅葉がそれでいいのなら、もうそれでいいよ……あと、ルール変更は嘘だろ？」

「嘘というか冗談の部類だな。そんなわけで、女と男の約束だ。絶対に守れよな……と、ようやく八雲が出てきたな」

言葉通り、下着を両手に携えた八雲が、二人のもとへと駆け寄ってきた。

「なあ八雲、お前も十六歳なんだから、少しは恥じらいを持とうぜ？」

無垢な顔して下着をさらけ出している八雲に、三雲は兄として指摘した。

「大丈夫だよ、みつくん。恥じらいなんて後から勝手についてくるよ」

「いや、確実に恥じらいは置き去りにされてるぞ？ 早く手を差し伸べてやれ」

「八雲、そんな弱い恥じらいならいらぬ。恥じらいが自分自身の足で立ち上がるまで、八雲は恥じらわぬ」

頑なに恥じらわぬと主張する八雲。三雲は折れた。

「……もういいや。それじゃ、紅葉の迷惑にならないようにな」

「うんっ！ 行つてきまゝす」

「三雲、約束だからな！」

「分かつたよ……午後五時な」

「ああ、紅谷荘の場所は知ってるよな？」

紅葉は嬉々として三雲に確認した。

町全体を仕事場としてる三雲。訪問したことはないものの、紅谷荘の位置は認知していた。部屋番号も、以前紅葉本人から聞いたことがある。

「大丈夫だ、問題無い」

「そっか、ならまた明日な！」

と、そんな会話を交わした後、紅葉と八雲は階段を上がっていった。

そうして三雲は、急いで段ボールハウスへと駆け寄り、下着類を取り出して、東山たちと共に銭湯へと向かった。

「それではお休みなさい」

再び橋の下へと帰還した三雲は、東西南北の四人に就寝の挨拶をした。

四人も各々挨拶を返し、そうして段ボールハウスに帰宅した。

三雲は一度大きく伸びをした後に、

「ただいまー」

と、屋内に入った直後、

「みっくん！ みっくん！ これ、これ見てよ！」

鈴の音のような声を響かせて、八雲は一枚のビラを三雲に見せた。室内は暗闇に包まれているが、しかし雲仙兄妹は夜目が利く。三雲はビラを受け取り、内容に目を通した。

『第一回、新婚さんかかってこんかいコラ！ 最優秀新婚夫婦に

は賞金百万円』

と。

三雲がそこまで読んだところで、

「出場しようよ！　するしかないよ！　だって百万円だよっ？」

弾んだ声で八雲。三雲は記述を最後まで読み、ようやく八雲に言葉を返した。

「た、たしかに百万円あれば脱貧乏も夢じゃないけど……でも『結婚三か月以内の夫婦』ってのが条件だし……いや、そもそも夫婦じゃないだろ？」

「騙せるよ！　みつくと八雲なら確実に騙し通せるよ！　それに、ほらっ！」

八雲は左手薬指にはめられた指輪を三雲に見せた。

「ちゃんと結婚指輪だつてあるんだよっ？」

言われて、三雲はしばらく思索。そして、

「……よし、出場しよう！　百万円獲得して、アパート借りて、仕事探して脱貧乏だ！」

「うんっ！　それじゃあ今日から、八雲たちは雲仙兄妹じゃなくて雲仙夫婦だねっ！」

喜色満面の八雲。そのまま三雲の腰に抱きついた。

雲仙夫婦　いつもなら否定する三雲だが、百万円が懸かっているととなると別である。

大会当日に完璧な新婚夫婦を演じるため、早いうちに『八雲とイチヤイチヤすること』に慣れておいたほうがいい、とそう考えをまとめた三雲は、八雲をギュッと抱きしめた。

「え、み、みつくん？」

抱きつくことは数あれど、しかし抱きつかれたことは一度もない。

八雲は一瞬、なにが起きているのか分からずに、きよとんとした。

「いや、大会当日に怪しまれないためにも、『なんか新婚夫婦っぽい』と思ったことは、とにかく実行しようと思ってな」

身体を離し、照れ顔で三雲が言った。八雲はペアッと顔を明らめ、
「うんっ！ それじゃあ早速、夫婦の営み」

「それ以外で！」

三雲は、八雲の言葉を先読みして、否定した。

「キスは？」

「キスもダメ……でもイチヤイチャは許可するから、明日から練習しようぜ？」

「公共の場でイチヤイチャしてもいいの？」

期待感の込められた声で八雲。三雲は無言で頷いた。

「うれしっ！ みっくん公認のイチヤイチャ、八雲うれしっ！」

至福の表情で八雲。

ここで、三雲は先程から気になっていたことを尋ねた。

「ところで、このビラはどうしたんだ？」

すると八雲は顔を曇らせた。

「電柱に貼ってあったのを偶然見かけて……それで、早くみっくんに知らせたかったから勝手に破ってきたの……悪いこととしてごめんなさい」

そうして八雲は俯いた。三雲は八雲の頭にポンと手を置き、

「八雲はいい子だから、誰も怒らないから、だからそんなに落ち込むなよ。八雲には笑顔が一番似合うんだからさ」

すると八雲は、ゆっくりと顔を上げて、

「うんっ！ 八雲、笑うっ！」

と、満面の笑みを顔に浮かべた。

「おう、笑え笑え」

言って、三雲も笑い返した。

こうして期間限定で雲仙兄妹から雲仙夫婦となった二人は、三日後に控えた大会に備え、この日からイチヤイチャ技術をマスターするための練習を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8145t/>

二人の住居は段ボールハウス

2011年6月4日16時40分発行